

Title	コイ文化を通じてみる日本の生活環境変化
Author(s)	Borre, Caroline
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/58809">https://hdl.handle.net/11094/58809</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	Borre, Caroline
本籍(国籍)	
学位の種類	博士(日本語・日本文化)
学位記番号	甲第67号
学位授与年月日	平成18年9月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	コイ文化を通じてみる日本の生活環境変化
論文審査委員	主査 教授 森 栗 茂 一 副査 教授 奥 西 峻 介 副査 助教授 尾 上 新太郎 副査 早稲田大学 鳥 越 皓 之 副査 佛教大学 八 木 透

## 論文の内容要旨

日本文化は人間と魚との関わり合いが深いと言われるが、その魚文化の源泉はどのような文化であろうか。

日本は海に囲まれている島国であるから、日本の魚文化は海の魚が中心であろうと考える人は少なくないと思う。確かに、塩鱈を山奥まで運び、奥地で海の魚を食べる文化もあった。しかし、地引網のような大規模な海の漁業法の開発は比較的新しいものであり、むしろ、川や池で魚を獲る淡水漁業こそが、日本文化の中で大きな位置をしめていた。従って、私は、日本の魚文化は海水魚ではなく、淡水魚をベースにした文化であると考えている。

日本で生息している淡水魚の種類は数多くあり、存在している淡水魚文化も多様であるが、本稿では話をコイだけに絞る。なぜなら、コイは、最も古くから琵琶湖に代表される日本の淡水を泳いでいるだけではなく、日本全国に多様な魚文化を生み出しているからである。フナもコイと同じく、旧石器時代から日本に生息している古い淡水魚であるが、中世に食品として最も尊ばれていたのはフナではなく、コイであった。サケとマスの文化も豊かで、根強い文化ではあるが、ほとんど東日本に限られた文化であり、全国的な影響に及ぶことはなかった。従って、日本の淡水魚を代表しているのはコイであると思っているから、本稿では、コイに関する文化について、焦点を当てて論じたい。

ヨーロッパにおいても、日本を代表する魚と言えば、彩り華やかな錦鯉を心に浮かべる人は多いが、日本学においては、コイの研究はほとんどない。日本でも自然科学的な研究を除いて、コイを対象とする文化研究はあまり行われていない。

しかし、日本には豊かなコイ文化があると私は思う。観賞用の錦鯉以外にも、コイ料理・コイ伝承など、様々なコイ文化が存在する。本稿では、日本でみえる多様なコイ文化を、

「稲」・「食」・「住」・「信」に関するコイ文化に分けて、それぞれの章をたて論究し、日本文化の中のコイの意味を考察した。コイ文化を通じて見えるのは、日本での水を中心とした生活環境の変化であると推定するから、日本人の生活環境の変化に着目しながら、日本のコイ文化の意味を論じた。

第1章では、まず日本の淡水魚文化の起源を明らかにした。そして、淡水魚文化の始まりまでさかのぼることのできる水田漁労と水田養鯉というコイ文化を詳説し、このコイ文化を通じて見る環境変化を示した。

コイ科魚類を含む淡水魚が日本列島で生息するようになったのは、500 万年前のことであると思われるが、最初の分布は西日本に限られていた。東日本の大部分はまだ海面下にあったため、コイ科魚類は移り住むことはできなかったが、後も本州中部の「日本アルプス」ができたから分布を広げることが出来なかった。かわりに、東日本では、回遊性淡水魚であるサケ類が多く生息するようになった。

こういった自然環境の相違とそれの反映と考えられる文化の違いは、縄文時代に入るとさらに進化する。東日本には「サケ・マス」を中心とした縄文文化が発展するのに対して、西日本では「フナ・コイ」の縄文文化がみえる。淡水の豊かな西日本では、淡水魚がよく食べられていたのは明らかであるが、中でもフナとコイが多かった。縄文人は、雨季に産卵のため湖岸に近づくコイやフナを大量に獲っていたと思われる。

産卵期の寄り魚となるフナやコイは、弥生時代になると、新しくできた水田まで入ってくるようになり、水田漁労の対象となった。水田というのは、人間にとって農業の場であり漁労の場であるが、コイにとっては産卵に最適の水界の広がりである。縄文時代に日本人と淡水魚との間にできた関係は、稲作文化の影響でさらに強くなり、相互関係に進化したと言える。このコイと稲作の相互関係こそが日本のコイ文化の始まりである。

8 世紀以降、水田の広がりと共に、コイ科魚類が東日本でも分布するようになったが、水田でできた相互関係は、時代の流れで、水田漁労から水田養魚へ、水田養魚から水田養鯉へ、というふうに淡水魚文化からコイ文化に変化した。水田養鯉というコイ文化は、現在まで存続するが、昭和 30 年代以降、化学肥料の多投と除草剤などの農薬の使用といった水田環境の変化のため衰退し始まった。しかし、近年、環境や健康への意識の高まりのため、水田養鯉と水田漁労の復活がみえる。

第2章では、日本のコイを食べる習慣について述べた。まず、『本朝食鑑』や『魚鑑』などの文献を引用しながら、コイが他の魚と区別され、上級の食品として見なされてきたことを示した。川魚の王とされていたコイの中でも、特に淀川のコイが尊ばれていたようである。コイが美味しいだけでなく、コイが様々な病気を治す力を持っていると記述する文献もみえる。『徒然草』には、コイが天皇の前で調理されるものであるから特別な魚であると書かれている。つまり、コイを食用に関係する習慣を文献上から見たら、普通の魚

ではなく、特別な魚として見られていたことは確かである。

続いては、日本の最大の淡水湖である琵琶湖に、豊かなコイ文化が残っており、その滋賀県のコイ料理に注目した。コイ料理は多様であるが、滋賀県でもコイを正月など特別な時に食べる習慣が見える。さらに、コイに何らかの身体治癒力があると考えられている筋もある。

滋賀県のコイ料理について述べてから、フィールドをさらに絞り、琵琶湖の北西岸にある高島市新旭町の針江の魚食文化について詳説した。針江には、淡水面と湧水が豊富であり、コイを含む淡水魚もまだよく食べられている。しかし、現在の食文化は過去の食文化と違い、昭和 30 年代以降の水環境変化を反映し、淡水魚意外も食べるようになってきている。

このように、コイに関する「食」の文化を見ると、コイを食べなくなる傾向が見える。それは、コイなどの淡水魚が人間の生活環境から消えつつあることを物語っている。人間の暮らしの場にいるコイを含む淡水魚の数が減ったというのは、水環境の汚れや水田と川との仕切りなどの人工的な改造のためであろう。言い換えれば、「食」に関するコイ文化の衰退は、汚れや川改造といった水環境の変化を反映している。

第 3 章では、日本の「住」にまつわるコイ文化を検討した。コイは自然界にいるものであるから、第 1 章で述べた水田を除いて、人間の生活世界にはいない。ところが、日本では、人間が自分の生活世界の中にまでコイをとり入れている文化がある。

日本では、家にいるコイと言え、毎年 5 月 5 日に家の飾りとしてあげられる鯉幟のコイを思い浮かべる人は多いであろうから、まず鯉幟のコイ文化を明らかにした。ところが、鯉幟のコイ文化は中国のコイ文化の影響を受けてできた文化で、歴史はそれほど古いものではない。しかし、外来のコイ文化が容易に受け入れられたのは、日本にコイ文化の下地があったことを示していると思われる。

確かに、日本の住居にみえるコイは鯉幟のコイだけではない。暮らしの周りにある池でコイを飼う文化もある。従って、コイを観賞にする習慣、および、観賞を目的とする錦鯉について次に考察した。

コイが飼われる池は、屋外で、生活の場から少し離れている。ところが、滋賀県では屋内、もしくは屋外の「洗い場」でコイを飼う習慣がみえる。屋内外の「洗い場」は、家屋内外の洗い場とカワ（住居周辺の河川と水路）とを行き来するコイによって結びつけられている。特に洗い場が多く残っている針江を見ると、カワの汚れや水位の低下、湧水の枯渇といった環境変化が、洗い場のコイ文化に反映している。

第 4 章では、伝承や信仰に関するコイ文化を論じた。5 つのコイ伝承に着目し、それぞれの伝承の背景となった地域の環境変化に焦点をあて、コイ文化が環境変化を語るという推論を検証した。

まず、丹波国大井神社（京都府亀岡市）と摂津国棕橋神社（大阪府豊中市）にまつわるコイ伝承の解釈を試みた。大井のコイ伝承が秦氏によって行われた大井低湿地の開発を語っているのは定説になっているが、棕橋のコイ伝承の場合にも、過去よくあった水害や低湿地の開発といった環境変化がコイ伝承によって物語られていると推論できた。

コイ伝承は、伝統的な民俗が多く残る地域だけではなく、古くからの都市部にも存在する。そこで、江戸時代に「三都」と呼ばれた、代表的な日本の大都市、京（京都）、江戸（東京）、大坂（大阪）にある鯉塚とその伝承を紹介した。

「三都」の鯉塚とそのコイ伝承は、開発や水害という環境変化を直接に言及することはないが、鯉塚がある場所やコイ伝承ができた時代を考察すると、「三都」の鯉塚伝承の背景にも、開発や水害の歴史がある。京都の鯉塚は、埋め立てられた大倉池の堤防に位置するから、池を埋め立てたという開発の記憶を伝えている。東京のコイ伝承の背景には、不忍池の水を浅草に東流したという江戸の都市開発、及び、その都市開発で浅草に洪水が起きることに対する抵抗があると推測した。大阪の大長寺のコイ伝承は、網島地域で洪水を解消できない「川の改造」という開発への抵抗を表していると思う。つまり、コイ伝承のコイは、水害や開発という環境変化の記憶の象徴である。

「稲」・「食」・「住」・「信」のコイ文化を総合的に見ると、カワの汚れや湧水の枯渇などのような漸進的な環境変化、または、水害や開発などのような急激な環境変化がそのコイ文化に反映されているのは明白であろう。言い換えれば、日本文化の中のコイは、水を中心とした生活環境変化の指標である。または、コイが環境変化の語部である。

コイが環境変化を人々に語りかけるということは、大変重要な意味がある。それは、近年の水田養鯉の復活や針江のカバタへの関心の高まりなどからもわかるように、コイが人々に環境変化を語りかけることによって、環境の大切さを意識化させるからである。環境の大切さを意識化させるから、水田養鯉やカバタのようなコイ文化の促進で汚れた水環境を改良する可能性がみいだせると考えている。つまり、昭和 30 年代以降次第に人間の世界から離れて行ったコイを生活環境の中に再配置することで、人間にとって大切な水時環境を回復することができるのではなかろうか。

## 論文審査の結果の要旨

本論は、日本文化における淡水魚文化こそ、日本魚文化の特質ととらえ、とくにコイに着目して、「コイと稲作との関係」、「コイと食」、「コイと住居」、「コイと信仰・伝説」といった、多様な視点から分析した意欲的かつ、重厚な論文である。本研究は、日本におけるコイの生態的起源、稲作変化と内水面漁労の変化についての最近の生態学・考古学の研究成果を綿密に押さえ考察している。かつ、古典文献を丁寧に原典から押さえてコイ食の展開を分析している。また日常食と非日常食の全体構造の変化のなかでのコイ食を分析している。その上で、滋賀県高島市針江の洗い場（カバタ）のコイや、各地のコイの信仰・伝承について、アンケートやカバタの分布悉皆調査などのフィールドワークをおこなっている。方言の強い琵琶湖沿岸における聞き書きは、極めて困難であったろう。

また、京都府亀岡市大井神社や大阪府豊中市棕橋神社における聞き書き・アンケートは、都市化地域でもあり困難であったであろう。が、そのなかでフィールドワークを推進した研究姿勢、努力は、主査・副査教員全員が、高く評価するところである。

その結果、総合的にコイ文化をとらえ、環境が変化すればコイの姿が消えるといった意味、もしくは水環境の重要性を示唆するといった意味で、コイ文化が日本の環境変化の指標であり、「コイが環境変化を語りかけている」ことを見事に指摘している。また、大井神社や棕橋神社のコイ伝説は、古代における低湿地の開発、地域開発を示唆しており、開発史を物語るものであることを指摘している。本研究は、単なる日本文化研究ではなく、安易な比較論を避け、個別地域のフィールドの語り、思いをすくいあげたところから、日本の淡水魚文化を点検したという意味で、突出した視点を有している。一方で、個別の伝統内水面漁労文化の分析に終始し、淡水魚文化の現代的意味、コイの本質的文化意味を見失いがちであった日本の環境民俗学にとっても、大きな示唆にとむ成果となっている。

しかしながら、本研究は多様な視点から分析しようとしすぎて、生態論的には、特定の成果に依拠しすぎる傾向にあり、自らのアンケート、フィールドワークを活かしきれていない部分もある。また、アンケートの量についても、若干、課題が残るものといえる。

とはいえ、そのことは本研究の学術的意味に疑問をはさむほどのものではない。今後は、琵琶湖水環境カルテなどの基礎資料をもっと活用し、徹底したフィールドスタディーに基礎をおいた総合的研究活動が期待される。本論は、ボレー・カロリンが、そういう方向での優秀な研究者の素質を十分に備えていることを示すものであると、主査・副査全員は一致して認めるところである。

なお、本論の記述は、論文スタイルの丁寧な日本語で記述されており、当該研究者の日本研究にける意欲を大いに示すものであり、今後の研究の展開が期待できる。